人民は弱し
官吏は強し

星 新一

新潮文庫

新潮文庫　ほ-4-16

昭和五十三年七月二十五日　発行
平成九年七月十日　十八刷

著者　星（ほし）　新（しん）一（いち）

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Shin'ichi Hoshi 1967　Printed in Japan

¥438

ISBN4-10-109816-6 C0193

新　潮　文　庫

人民は弱し　官吏は強し

人民は弱し　官吏は強し

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

大正三年の早春。京橋の交差点そばの大通りに面して、鉄筋コンクリート四階建てのビルができた。なにもかも新しく、外側は白く明るくぬられていた。窓は大きく、日光を一杯に吸いこんでいた。近くの商店や住宅はせいぜい二階建ての、くすんだ色をした木造かレンガ造りで、明治のにおいを濃くただよわせている。その対照は異様ともいえるほどきわだっていた。

通りがかりに眺める人の頭には、なぜとはなしにアメリカという言葉が浮かんできてしまう。時たま絵葉書や写真画報などで目にする、ニューヨークとかサンフランシスコとかいう名の街。それに写っている建物のひとつを、いたずらな神がはるばる運んできて、ここにむりやり割り込ませた。そんな印象を受けるからだった。

アメリカを連想させるものは、建物の感じばかりではなかった。ビルの屋上にとりつけてある、赤くふちをとった大きな看板。そこには電球を並べて巨大な文字が横書きされてあった。夜になると電気がともり、東京の空に浮きあがるように赤く輝いて、見る者に告げる。「クスリはホシ」と。

そのビルの最上階の社長室に星一がいた。きちんとした服装、きれいに刈った髪、細い銀ぶちの眼鏡をかけていた。どちらかといえば長身で、動作には颯爽としたところがあった。彼のまわりにもやはり、どこか他の者と異質なものがあった。ビルと同じく、会う者にアメリカの空気を感じさせる。同じ種子からの草花でも、よそで育ててから移し戻されたのは、やはりどこかちがう。そんな感じだった。

また、彼の顔の上には、だれしもが楽しげな表情をみとめた。それを得意さのあらわれと受け取り、内心で不快に思う者も少なくなかったにちがいない。しかし、これは生れつきのものだった。童顔であることと、性格が楽天的であることは、いまさらどうしようもない。

あるいは、生れつきでなかったとしても、アメリカで青年時代をすごすと、微笑しているような顔になってしまうものなのかもしれなかった。帰国し、深刻そうな顔つきの人びとのなかにいると、とくに目立つようだ。

星一は四十歳、まだ独身だった。事業を育成する時期においては、その責任者は全精力をつぎこむために、独身であるべきだ。彼はこんな信条を持っていた。また実際問題として、これまでのところ、結婚を考えるような精神的、時間的余裕もなかったのだ。

「星君。いいかげんに結婚をしたらどうだ。若く見えるからまだ結婚しなくてもいい、という理屈はないぞ。家庭を持ったほうがいい」

親しい友人から、こんなふうに言われることがある。そのたびに彼は反問した。

「家庭を持つと、どんないいことがある」
「妙なことを言い出すな。たとえばだね、病気になった時に、妻子は親身になって世話をしてくれる」
「それはそうかもしれないが、ぼくはずっと以前から、病気をしないことにきめているんだ。だから、そのたぐいの恩恵にあずかる必要もないだろう」
「病気にはならないですむかもしれない。しかし、人間には寿命というものがある。最後をみとってくれる者がいないのは、さびしいことじゃないかな」
「大丈夫だ。ぼくは死なないことにきめているんだ」
友人はあきれ、星は面白そうに笑う。アメリカ生活でしぜんに身についたウィットでもあったが、また本心でもあった。自分の前には、可能性をひめた世界が無限にひろがっているように思えてならなかったのだ。
それは根拠のない予感といったものではなかった。自分のはじめた製薬の仕事は、順調に急速に発展しつづけている。行きづまることがあるとは、考えられなかった。仕事が自分であり、自分が仕事である。したがって、終末の念が心に浮かぶことなど、なかったのだ。
普通の者だったら、たしかに得意になるところかもしれない。普通でない者だったら、いまが大切な時だ、いい気にならずペースを着実に守るよう努めなければと、大いに自戒するところかもしれない。

しかし、いまの星の頭をしめている問題は、そのいずれでもなかった。彼はアイデアを求めて考えつづけていたのだった。この現状からさらに高く飛躍するには、新しいアイデアが必要なのだ。

この社長室の壁ぎわには、大きな製品陳列棚があった。なかには派手な赤い缶の胃腸薬をはじめ、かぜ薬や目薬など、さまざまな品が並べてある。来客があると、星はそのひとつひとつを指さし、相手に口をはさむ余地を与えず、長々と楽しげに説明する。知識を他人に進呈することが、うれしくてならないという様子だった。来客のほうは、いつ用件を切り出したものかと、そればかり気にし、ほとんど耳に入らないことが多い。

しかし、自分ひとりの時には、星の目は陳列棚のなかの、イヒチオールという薬にひきつけられてしまう。その理由は、これが最初に作りあげた製品だったからだ。人生でいえば初恋の女性、作家でいえば処女作、役者でいえば初舞台といったところだった。

十二年間にわたる苦学生活をおえてアメリカから帰国したのが、十年前の明治三十八年。中央新聞社からは月給三百円でつとめないかと、破格の条件でさそわれ、朝鮮総督府からは腕のふるいがいのある官職への話があった。しかし、そのいずれをも断わり、借り集めた四百円の資金で作りはじめたのが、このイヒチオールという薬だった。大きな組織に入って仕事をするのも悪くはない。だが、自分の能力と責任において、なにか新しいことをやってみたかったのだ。

といって、星がアメリカで学んだのは薬の方面ではなかった。専門は政治や経済であり、とくに熱心に研究したのは統計学だった。しかし、売薬についての知識は、いつのまにか、もっと切実に頭のなかにしみこんでいた。

異国で送金なしに苦学する場合、なんといっても最大の災厄は病気である。医者にかかるには大金がいるし、へたをすれば、望みなかばでむなしく帰国しなければならない。病気をしないことにきめる。この信念めいたものを持つに至ったのも、ふしぎではなかった。そうでなかったら、毎日がはなはだ不安なものになってしまう。

しかし、気力と注意だけでは防ぎきれない病気もある。星はからだの調子が変だなと思うと、すぐに売薬を買って早目に悪化を食いとめる習慣が身についてしまった。ひどくしてから医者にかかるより、はるかに安くてすむ。

名称や効能や定価を、いやでも覚えてしまった。ずいぶん各種の薬を使ったものだったが、そのなかのひとつにイヒチオールがあり、打撲傷の時に湿布として用いるとよくきいた。黒いねばねばした薬品で、いかにも薬らしいにおいがする。

アメリカであれだけ効能がみとめられ、あれだけ普及しているのだから、わが国でも作れば使う人もふえるにちがいない。こう判断し、冒険と知りつつ着手した。しかし、化学にくわしいわけではなく、もちろん当初はそれなりの失敗や苦労があったが、一方、できた製品はかなりの利益を含んだ値で問屋が引き取ってくれた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

これに力づけられ、工場をひろげた。原料はガス会社から、廃液をきわめて安く払い下げてもらえることになり、面白いようにもうかった。

ということは、と星はその時に気がついた。人びとが輸入した商品を使うことで、いままでは外国をどんなに面白がらせてきたことだろう、と。この利益と興味とを、わが国に取り戻さなければならない。すなわち、輸入にたよっている品の国産化とは、自国の損失を防ぐことでもあり、事業としても有望である。べつに取り立ててさわぐほどでない、ありふれた原則かもしれない。しかし、イヒチオールを作りながら悟ったこの考え方が、星の今後の発想をずっと支配することになるのだった。

イヒチオールでの利益をもとに、各種の売薬をつぎつぎに作り、販売した。また、資金面での応援者もつき、株式組織にし、スタートは好調だった。販売方法においてはアメリカで学んだやりかたを応用し、それも成功した。新聞に大きく商品の広告をし、一村に一軒ずつの特約販売店をおくという方法である。

広告をともなった商品は、いうまでもなく売行きがいい。販売店にとっては魅力だ。しかも一村に一軒の独占となると、さらにうまみがある。ただし、その特約を維持するには、努力して売上げを高めなければならないことになっていた。

資産があって、ふところ手でもうけようとする薬店より、資産のない点を努力でおぎなおうとする薬店のほうがいい成績をあげた。その統計が出てからは、特約店を選ぶに際し、資産の点は

考慮しないことにした。財産は活動を助ける条件ではない。

アメリカで学んだことの活用は、販売法といった表面的なものだけでなく、もっと根本的な点にあった。金持ちには資金を出させ、従業員には仕事を与え、販売店には商品をまわし、消費者にはそれで生活を高めさせる。そして、いずれの関係者にも利益の配当にあずからせる。この組織を作りあげ、運営することこそ、本当の意味の事業なのだ。

だれも指摘していないが、これについての理解を人びとに広めることができれば、わが国もアメリカのごとく活気ある、能率的で豊かな国になっていくのではないだろうか。欧米と真に対等な立場になれるのではないだろうか。これが仕事における星の方針だった。

方針であるだけでなく、事実このビルのなかには活気がみちていた。和服姿の者もまざっていたが、若い社員たちが大ぜい机を並べ、ソロバンの音が忙しげに響いていた。よそではまだ珍しい存在である電話のベルがひっきりなしに鳴り、特約店の契約のために地方から上京した者の、なまりのある話し声が各所でしていた。

また、一階の小売部もにぎやかだった。薬を求めに来た客に加えて、ショーウインドウのある新しいビルに入ってみたいだけの見物人も多かったのだ。店内は明るく、ガラスのケースにはさまざまな色彩の売薬が並べられている。壁に貼(は)られている大きなポスターの図柄は、白鳥と若い女とを組合せたもので、新鮮さが人目をひいた。

男の社員たちは階段をあがる時、ほとんどの者が二段ずつ駆けあがっていた。その音はコンク

リートの床から高い天井へと、軽快に反響した。これは星の癖がいつのまにか伝染したためだが、そのほうが自然のような雰囲気が、ビルのすみずみまで支配していた。会社の発展にあわせて歩調をとっているようであり、歩調をこのように早めているから、発展のテンポがこう早いのだといえるようでもあった。どちらなのかはわからなかったが、それでいいのだった。活気と発展とは同一のものなのだから。

ひとつの新興勢力といえた。そして、いうまでもなく、これをよく言わない人たちも存在した。売薬とは個人経営でほそぼそとやり、確実な利益をあげてゆく仕事だという、在来の常識の殻にこもった同業者たちである。新しいビルとその内部の活気とは、彼らを不安にさせ、いらいらさせた。恐るべき強敵にも見え、危険な混乱をまきちらす者にも見えた。といって、どうしたらいいのか見当もつかなかった。押えつけようにも、その方法がわからず、まねをしようにも、どうやったものかわからなかった。

敵と見た者は嫉妬して山師と呼び、混乱のもとと見た者は、すぐ行きづまるだろうとうわさして自分をなぐさめた。しかし、星の勢いはいっこうにおとろえず、ために彼らの心のわだかまりは、内にこもる以外なかった。

あとになってみれば、この感情に気づいてもっと警戒すべきだったことになるのだが、星はべつに気にもとめようとしなかった。アメリカ育ちの彼にとって、この種の感情は理解のそとにあったのだ。フェアな競争でおくれをとったら、相手を追い抜く新しい道を開拓し、そのつみ重ね

で産業が進歩する。星はこの公式しか知らなかった。陰にこもった暗くよどんだ存在、それをかぎわける力をそなえていなかった。

悪評がまったく耳に入らなかったわけでもないのだが、実績が誤解を打ち消すだろうと考えていた。創業以来の十年、やましい行為なにひとつなく、堅実な上昇をたどってきたのだ。そして、米人に設計させたこのビルを造るまでに成長した。

屋上にあがってみると、東京湾から宮城（きゅうじょう）までをずっと見渡すことができた。つまり、このへんで最も高い建物なのだ。もっとも、少し遠くには新築されてまもない、ルネッサンス式三階建ての東京駅があり、その大きさには及ばなかった。しかし、国家が七年の日数と三百万円の金をかけて造った駅だ。比較するわけにはいかない。

ビルの屋上に立つ時も、星の表情には現状への満足感はない。現状維持の精神が少しでもあったら、第一ここまで到達できなかったはずではないか。そもそも、アメリカまで苦労して出かけることも、帰国して薬を作ることもしなかったはずだ。

それに、かすかにではあるが、関係者たちが事業とはなにかを、やっと理解しかけてきた段階でもある。それをさらに徹底させて実地に知らせるためにも、ここで飛躍を試みなければならない。活気ある冒険こそ、成功をもたらす源泉なのだ。ビルの高いことなど、自慢すべきことではない。ニューヨークにはこの何倍も大きなビルが、数えきれないほど並んでいたではないか。

2

このところ毎日、星は社長室でずっとアイデアを模索しつづけていた。といって、それに一日中かかりっきりだったわけではない。それに専念できるのは、夕刻になって社員たちが帰り、ビルのなかに静かさがただよいはじめてからのことだった。昼間は事務の決裁や来客との応接に忙しく、また一日に一回は大崎駅のそばの工場へ、ようすを見に行かねばならなかった。

独身では帰宅しても意味がない。自宅はあるにはあるのだが、小さく粗末で、眠るための場所にすぎない。むしろ、この社長室が自宅といえた。

たまにはどこかへ出かけ、芸者を相手に酒でも飲んで気ばらしをしたらと、すすめる者もあった。アメリカ帰りの新進の事業家で、独身ということになれば、歓迎されるべき客といえる。しかし、その面白さを星は知らなかった。

十八歳で渡米してからのアメリカでの十二年間は、学校で講義を聞いているか、図書館や実地で調査をしているか、その費用をかせぐために働いているかのいずれかであった。また、帰国して製薬をはじめてからは、成功の確証のない新しい分野の開拓の毎日だった。ゆうゆうと遊びの味を覚えるひまは、まったくなかった。そして、いまさら覚えようとする気もなかった。遊びな

ど、どこが面白いのかわからない。仕事のほうがはるかに楽しさにみちている。

酒はきらいではなかった。それどころか、体質的には飲めるほうだった。しかし、しばらく前に完全にやめてしまっていた。星の家系には、大酒のために五十代の年齢で死亡しているのが多い。統計学によると、酒はやめるべきだとの結論になり、星はそれに従ったまでだった。また、薬の事業にたずさわる責任者が若死にしては、薬に対して申しわけない。いや、科学や社会に対しての裏切り行為ということにもなる。

タバコも一時は吸っていたが、それもやめてしまった。唯一の好きなものはスチーム・バスであった。滞米時代、時たま行ったものだった。金もかからず、熱い蒸気のこもった室内にいると、からだの疲れがとれ、緊張しつづけの精神がほぐれ、異国にいるきびしさをしばし忘れた。しかし、スチーム・バスは日本にはなく、行きたくてもどうしようもない。

椅子(いす)にかけて机にむかった星は、酒のかわりに、魔法びんにつめてある紅茶を自分でカップについだ。これが彼の愛用品だった。

静かな室内にたちのぼる湯気をみつめ、甘いかおりをかぎ、少しずつ飲みながら、彼は思考にとりかかった。しかし、アイデアというものは、ただ黙って待っていても、むこうから気まぐれに訪れてきてはくれない。無から有をうみだす作業が、そんなに容易であるわけがない。

多くの人の意見を集め、広く資料を調べ、とらわれない自己の判断で整理し、そこから新しい可能性をひきだすことである。具体的な世界から抽象の世界に飛び、ふたたび具体的な世界に戻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com